様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年５月２４日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０１２７
研究課題名（和文）　歌劇場の分析を通してみるドイツの文化・公共政策

研究課題名（英文）　Cultural and Public Policies in Germany Seen from an Analysis of Opera Houses

研究代表者
江藤　光紀（ETO MITSUNORI）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：10348451

研究成果の概要（和文）：各地に劇場が林立し、劇場大国と呼ばれるドイツだが、地方分権が行き届いているため、各地の劇場のあり方も様々である。本研究では、それぞれに性格の異なる劇場をサンプル的に抽出し、その地の歴史性・特殊性／日々の公演の実際・運営上の工夫／財務構造とその問題点、という三つの視点から分析することにより各劇場の特性を総合的に捉え、「劇場大国」と一口にくくられるドイツの劇場が抱える問題の共通性と個別性を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：Germany has a large number of theaters and is often called “a country of theaters”. Because of the decentralization of power from the central government to the local governments, the ways in which theaters are run differ in each state, city, and community. This study provides a taxonomy of theaters in Germany, selects a typical example from each category and analyzes each in terms of its history, location, the quality of its daily performances, the creativity of its program, its financial structure, its efficiency, and so on. A comprehensive understanding through these viewpoints makes it possible to evaluate theaters in Germany in their diversity and provide a framework through which to deal with their individual problems.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１２年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学、芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：オペラ、ドイツの文化政策、劇場文化、アート・マネージメント

１．研究開始当初の背景

劇場の特性は単に公演内容の質をみるだけではなく、公共性という観点から見た補助金の効率性や、劇場がその地にあることによって得られる地域コミュニティへの影響までも加味して判断されるべきである。ところがこうしたファクターは、多くの場合それぞれが独立した問題として個別に取り上げられるに過ぎない。

２．研究の目的

そこで本研究では歴史・美学・財務の、異なる分野にまたがる研究者が調査チームを作り、具体例に沿ってそれぞれが調査を行った。また可能な場合には劇場支配人など関係者に具体的な運営方法などについて聞き取り調査を行った。その後、それぞれの結果を持ち寄って、当該劇場の特性について総合的な見地から判断を下す。こうした事例を重ねることで、ドイツの劇場のあり方を総合的に把握していこうというのが最終的な目的である。

３．研究の方法

まずは劇場を立地（国境付近であるか、国の内側にあるか、旧東圏／旧西圏にあったか、など）・規模（席数、雇用人数など）・影響力（地域密着型か国際的な劇場を志向しているか、など）の点から分類し、さらに運用形態の個別性（複数都市を巡業する形になっていたり、近年大きな運用形態の変更があったなど）も加味した上で、調査対象の劇場を絞込み、現地調査を行った上で、地域性・歴史性／公演計画・公演概要とその水準／財務の特性という三つの観点から、タイプ別に分析を行った。

具体的に訪問し聞き取り調査を行ったのは次の団体・劇場である（括弧内は所在地と選定理由）。ドイツ舞台協会（ケルン。ドイツ国内の劇場に関する様々な統計値を継続的に収集している。ドイツの劇場を語るときに基礎とされることの多いこの統計の、数値の集め方やその問題点などを聞く）。ザールラント州立劇場（ザールブリュッケン。国境付近に位置し、近隣国のフランスやルクセンブルクとの交流もさかん。また州内にある唯一の劇場でもある）。フライブルク劇場（フライブルク。大学とエコの町で知られるこの劇場は支配人のプログラミングに特色があることで知られる）。リューベック劇場（リューベック。支配人が財務畑出身者という異色の経歴を持ち、劇場の運営においても古都としてしられる同市の観光資源を有効活用することで近年成功している）。リューネブルク劇場（リューネブルク。大劇場でも 500 席ほどしかない典型的な小規模劇場。戦後のアメリカ占領軍の娯楽施設として作られたものを転用した比較的新しい劇場）。デッサウ・アンハルト劇場（デッサウ。旧東ドイツに位置している。古くからの伝統を持つが、旧東圏の多くの劇場がそうであるように、州や市の財政難に悩む）。ヴィースバーデン劇場（ヴィースバーデン。近隣にマインツやフランクフルトなどの劇場が林立する一帯に位置している。そのなかでどのような独自性を打ち出しているか）。ライン・ドイツ・オペラ（デュッセルドルフ／デュイスブルク。今回の調査では唯一の大規模劇場であり、複数都市にまたがって公演を定期的に行っているという特色を持つ）。ハーゲン劇場（ハーゲン。座席占有率が８０％以上という市民から支持されている小規模劇場ながら、公的支援に関して恒常的な問題を抱えている）。

４．研究成果

事例研究を重ねることで、ドイツの劇場の運営の実際をふまえたうえで、現在置かれている問題点が見えてきた。それは要約すれば以下のようになる。

管弦楽団や合唱団を含め数百人の雇用を生み出す劇場は、地方都市においては大企業であること、その支出の大半は人件費が占めていること（人への投資が行われている）、

公が多額の予算を支出して劇場文化を支えている事実はドイツ全土に見られるが、その方法や負担の程度は州や市、自治体ごとに異なっていること、したがって所在している地域の特性や歴史的な経緯が劇場運営に大きな影響を与えていること、劇場間の優劣を測る単一の尺度は設定できず、各劇場の特性は多様性のもとに理解されていること。

また各劇場は東西統一以降グローバリゼーションの波にさらされたこともあり、一貫して厳しい局面におかれていること、旧東圏の状況は西に比べて概して厳しそうであること、それにもかかわらず多くの劇場がさまざまな工夫をしながら生き残っていること、そのために地域、とりわけ若年層への働きかけを積極的に行っていること、などである。

昨今のユーロ危機の影響は、ドイツ国内の好景気もあってほとんどみられないが、好景気による協定賃金の上昇が人件費総額の上昇を生み、これが経営を圧迫する。職能組合の発達しているドイツでは安易な人件費削減ができず、場合によっては議会も含めた問題に発展することがある。

現在のような体制が今後も維持できるかどうかに関しては、明るい見通しを持っていない関係者が多かったが、劇場文化がすぐに大きく毀損するような状況にあるわけでもない。様々な危機に直面しているとは言え、劇場文化の正統性については地方議会なども含め概ね各地で共通認識があり、それがドイツにおける劇場の多様性と裾野の広さを担保している。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①江藤光紀・城多努・辻英史
ドイツの劇場運営（２）―北ドイツの二つの劇場をめぐって
『論叢現代語・現代文化』第 10 号（2013）、37 - 65 頁。（査読あり）

②江藤光紀・城多努・辻英史
ドイツの劇場運営（１）―ザールラント州立劇場とフライブルク劇場の事例を中心に
『論叢現代語・現代文化』第９号（2012）、127 - 173 頁。（査読あり）

③江藤光紀
独歌劇場、地域密着に光―市民意識し『町の顔』を磨く
『日本経済新聞』2012 年 5 月 19 日付朝刊。（査読なし）

④辻英史
「『劇場なくしては不毛の地となる』―ドイツ歌劇場の使命感」ECHO　第 28 号（2012）、25-28 頁。（査読なし）

⑤江藤光紀
書評「ヴァーグナーの『ドイツ』―超政治とナショナル・アイデンティティのゆくえ」（吉田寛著）　『ドイツ研究』第 45 号（2011）、232－237 頁。（査読なし）

⑥辻英史
「遁れゆく市民―交響詩『英雄の生涯』と市民社会」『法政』4 月号（2011）。（査読なし）

⑦辻英史
「『由緒ある町の宝』―戦災からの復興と劇場の再建」『法政』38 巻 4 号（2011）21 頁。（査読なし）

⑧江藤光紀・城多努・辻英史
「ドイツの歌劇場の現状と問題点－ドイツ劇場統計を中心として」『論叢現代語・現代文化』第７号（2011）、27-53 頁。（査読あり）

⑨城多努
「第３章　ドイツにおける高等教育制度と大学の設置形態」　『大学の設置形態に関す

る調査研究』国立大学財務・経営センター研究報告　第 13 号（2010）、73－80 頁。（査読なし）

⑩城多努
「第 12 章　目的積立金に関する分析～財源としての役割に着目して」　『国立大学法人化後の経営・財務の実態に関する研究』国立大学財務・経営センター研究報告　第 12 号（2010）、139-144 頁。（査読なし）

〔図書〕（計１件）
①江藤光紀　『現代芸術をみる技術－美術・音楽・思想をめぐる１８章』東洋書店（2010）、1-318 頁。（査読なし）

〔その他〕
ホームページ等
クラシック音楽情報サイトの「クラシックニュース」の以下のコラム
(http://classicnews.jp)
江藤光紀「東京音楽通信」2011 年 3 月（フライブルク劇場、ザールラント州立劇場）、2012 年 3 月（リューベック劇場、デッサウ・アンハルト劇場）、2013 年 3 月（ヴィースバーデン劇場、ライン・ドイツ・オペラ）の海外情報欄にそれぞれの劇場の公演レヴューを掲載。

６．研究組織
(1)研究代表者
江藤　光紀（ETO MITSUNORI）
筑波大学・人文社会系・准教授
研究者番号：10348451

(2)研究分担者
城多　努　（KITA TSUTOMU）
広島市立大学・国際学部・准教授
研究者番号：30423966

辻　英史　（TSUJI HIDETAKA）
法政大学・人間環境学部・准教授
研究者番号：80422369

(3)連携研究者
水田　健輔（MIZUTA KENSUKE）
国立大学財務・経営センター・研究部・教授
研究者番号：30443097